

平成22年度 日田市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日田市立豊浦小学校 教諭 齊藤 貴司

1 派遣期日 平成22年6月18日（金）

2 研修先 学校名 筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚3-29-1
<http://www.elementary-s.tukuba.ac.jp/>

3 研修内容

学習公開・研究発表会

研究主題 「独創」の教育 第2年次 -授業作りの条件を探る-

(1) 公開授業参観

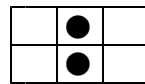
- 第5学年算数 指導者 山本 良和 教諭
- 研究主題 算数科において「『独創』の教育」が成立するために必要な条件を探る。
- 題材 単位量あたりの大きさ（混みぐあい）
- 本時の展開
- ①問題提示

●を人、四角は陣地とし、右の図のよう
にして、けんけんずもうを行ったとき、何
がどのようにちがうだろうか。

ア



イ



②気づいたことを発表する→話し合い

- 40分間、子どもの集中力が全く切れない。指導者の発問のタイミングのうまさを感じるが、特別な問いかけをしているわけではない。それなのに、子どもが次から次へと手を挙げていることに感心した。一問一答式ではなく、一つの答えに対して、反対意見があり、さらに付け加えの意見が必ず出てくる。どの発表者も自分の考えを説明することができて、友達と同じ意見であっても、違う説明の仕方ですべて同じ点を指摘できる児童が多いことに驚いた。中には、友達や先生に対してではなく、聴衆に向かって自分の考えを説明している児童もいた。一人ひとりの学習意欲の高さはもちろん、集団としての学習意欲の高さにも感心した。元々一人ひとりの学習意欲が高かったのか。または、集団の中にいることで、一人ひとりの学習意欲が引き上げられ、全体として意欲も高くなったのか。それとも、意欲を高める学習指導が、高いレベルで行われた結果なのか。そうだとしたら、具体的にどのような指導をしているのか。これらの疑問がわくほど、子どもたちの発表は途切れることなく続いた。授業者が意図した「混みぐあい」という言葉は使われず、子どもたちは「動きやすさ」という言葉を使って、「同じ人数で違う面積」「違う人数で同じ面積」「人数も面積も違う」、それぞれの場合の比べ方について自分の考えを説明することができた。

(2) 授業についての協議（授業者の反省を中心に）

- 倍数、約数、小数、分数、小数のかけ算は既習。小数の割り算は未習。教科書の計画通りには行っていない。「独創」の教育は「自分を意識し、自分らしさを出したときに、周りの友達が認めてくれる」ことだととらえている。「豊かな発想で、新しい視点を開発していく」のがテーマで、一単元を越えたような長いスパンで授業設計するのが大切である。
- 本時は単位量あたりの大きさについて考える授業であったが、前日にけんけんずもうを行った。はじめからどちらが混んでいるかではダメ。子どもは混んでいるという認識がなく、混んでいるというのは子どもの言葉ではない。実態を子どもの言葉で引き出すことが必要で、今回はそれが「動きやすさ」だった。「動きやすい」という言葉を実感させたいと考えて事前に仕込み（けんけんずもう）を行った。子どもは実体験を通して、

「一人あたりの面積の大きさ」＝「動きやすさ」を実感できたと思う。

- （広げたものを一般化していくのか、一般的なものを広げていくのかという質問に対して）授業をやる上では後者の方がいいと思う。
- （子どもたちが次から次へと発表し、意欲の高さを感じたが、どのような指導をしてきたのかという質問に対して）特にこれをしたということはない。子どもたちの声に耳を傾け、つぶやきを拾い上げるように心がけている。「子どもの必然性」が大切。教師が出した課題を、「子ども自身がはっきりさせたい。解決したい」と自ら学んでいこうとする姿勢をもつことが大切になる。そのためには、自らの問いについて思考を整理する力をつける必要がある。そのキーワードが「だったら」「もし」だと考える。

（３）全体会

○育みたい「独創性高き人」

- ・これでいいのかという問いを常に持ちながら自分の価値判断で生きようとする人
- ・自分らしさを肯定的に自己認識し、自分らしさを高めようとする人
- ・自分と関わる他者の「その人らしさ」を自分と異なるからこそ認めようとする人

- ゼロから何かを作り上げていくのではなく、誰かの考えに、さらに積み上げていくのも独創と言える。独創とは創造性を育てること。そのためのアイデアが大切である。

○アイデア創造の自問

- ・他の使い道はないか ・他からアイデアは借りられないか ・加えたらどうか
- ・変更してみたらどうか ・過去に似たものはないか

- 独創性を阻害するものは、「・習慣化して、それ以外のことを受け入れないこと。・自信喪失。・臆病」で、逆に促進するものは、「・積極性。・親しい人からの激励」である。「『独創』の教育」は、仲間との関わりの中で「独創性」を育むものである。

（４）分科会（算数科部会）

○研究企画部 細水保宏教諭の話

- ・２年間「『独創』の教育」を推進してきて、次のような成果が見られた。

- ・子どもから教えられることが多くなった。
 - 教師が子どもの発言をよく聞こうとするようになった。
- ・子どもたちが教科を楽しめるようになった。
 - 子どもたちの人間形成につながったと考えられる。

- ・教師が、以前よりも子どもたちの発言をよく聞くように（注意深く聞くように）なった。
- ・なぜこんなことを言うのだろうと授業者が親身になって聞くことが大事である。
- ・子どもに寄り添う目が大切である。発想が豊かな子はたくさんいる。教師が子どもの発想に声をかけてやれるかが大切である。子どもの発想の豊かさを味わいたい。そのためにも、子どもの発想に寄り添う姿勢を大切にしていきたい。
- ・個に応じた対応は大切であり、ともすると我々教師は個に対応することだけにとらわれがちだが、集団の学びの良さも大事にするべきである。友達と一緒に学ぶことが学校の活性化にもつながる。共同の学びの中でこそ「独創性」は育ち、また、発揮されると考える。

4 感想

授業者の山本教諭も、研究企画部の細水教諭も特別なことをしているわけではないと言っていたが、公開授業の生き生きと発表する児童の姿は、普段の指導の成果であろう。子どもたちは、反対意見を言う場合でも相手の考えを受け止めてから述べていた。誰かと同じ答えでも、考える過程で違いがあれば、それを懸命に説明しようとしていた。また、授業者も子どもたちのつぶやきをしっかり受け止めていた。今回の研究発表会に参加して、既習事項や情報を活用して表現する力を身につける指導を意図して行う必要性を強く感じた。